

【出題の意図】

オーバーツーリズムと呼ばれる昨今の地域社会の観光による地域振興と市民生活をめぐる可能性と問題性の双方について、この問題を地域社会の自助努力として突き放すべきではないと問題提起した福井一喜氏の新聞への寄稿（「(に)じいの議」無理をしない、観光のかたち 尊重すべきは小さな声」『朝日新聞』2023年7月12日付夕刊）、および著書（「無理しない」観光—価値と多様性の再発見—『ミネルヴァ書房、2022年』）の一部をもとに、あるべき観光と地域社会の共生について考えさせることを意図した。

こうした問題について考えることは、受験生が自らが居住する地域における産業と地域社会の共生について考え、行動していくだけでなく、多様な国際経験を経て各国の比較の観点から、よりよい人間社会を構想していくことにも繋がるであろうことも考慮した出題である。

出題にあたっては、共生社会が抱える問題について、抽象的な概念の理解と、時事問題に対する関心、そしてそれらの問題に対する論術の力を問うことを目的とした。

【評価のポイント】

問一は、読解問題である。この課題文1の論点は「たくさんの観光客が来てたくさんお金を使ってくれれば、国や地域の経済は本当に活性化するのだろうか」であるから、その期待に反する事例とその原因を字数制限内での確にまとめることが求められる。

事例およびその原因として、筆者は、①観光産業の特性から、需要が不安定で労働集約的であるため、大都市でなければ利益が出づらい、②富裕層向けの施設は外部資本によって経営されており、富が地域から流出する、③デジタルプラットフォームが地域の特性を重視していない、④観光業は宿泊業・飲食サービス業であり、そもそもジェンダー不平等があり、特に女性の非正規雇用の割合が高い、ということを挙げており、計4つの論点が過不足なく200字以内で述べられていることが求められる。

問二は、読解力、論述力とともに、受験生の時事問題に関する知識を問う設問である。以下の三点を評価ポイントとした。

①そもそも読解問題として、設問にある「観光による経済活性化という路線が抱える問題点」とは何かが書かれている必要がある。

課題文1と設問1の導入から「地域の自助努力の有無に問題があるのではなく、観光や社会の経済的な構造の問題であるということが理解されていない」というのがここで言う「問題点」であるから、この点が書かれている必要がある。

②読解問題及び論述力を問う問題として、「功」と「罪」の両方が書かれていなければならない。

③課題文2は、産業構造や観光産業の特性を考えずに同調圧力的に観光業に地域活性化を掛ける状況を批判しており、また、設問は「あなたの考え」を述べるのであるから、課題文のまとめの範囲を越えた論述が求められる。身近な観光地の問題の話や、自らが取り組んだ観光ボランティアに関する見聞を記述する例が考えられ、それらの事例をもとに、地域の個性を尊重し、経済構造を理解した、地域の利益になる無理をしない観光の在り方を考察したものが求められる。

【解答の傾向】

問1については、傍線①の前の部分を要約している解答が多く、傍線の後ろに述べられている「原因」、すなわち筆者が挙げた4つの原因についての的確にまとめた答案は少なかった。特に、社会のデジタル化やジェンダー不平等の観点が抜け落ちがちであった。

問2については、設問で求められている「問題点を指摘した上で」ということにきちんと答えているものが少なかった。また、「功罪」の意味を理解していないと思われる解答が散見され、「悪い点」の例を述べてながら「・・・は功罪である」と書いてあるような答案があった。

時事問題として、身のまわりの事例を交えて論述できていた答案は高く評価された。特にオーストラリアのウルル、ダークツーリズム、アドベンチャートラベル、温暖化など、海外の事例を挙げながら、自らの考えを述べた答案は高く評価された。

また、過去問で観光を扱った設問への解答かと思われるようなものもあった。受験準備として過去問に取り組む姿勢は評価できるが、設問への解答としては評価できなかった。

誤字は、比較的少なかった。

100字ほど字数が不足している答案があったが、できる限り字数を埋めるように努力して欲しい。

普段から新聞やテレビ、ネットなどで時事問題に触れ、様々な問題を自分事として考え、自分の意見を構築する習慣を身につけながら学習に励んでほしい。それは受験だけでなく、将来の自分への投資となるだろう。